

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）の言葉を掲載いたします。

貧乏人は、苦しいだけ、かえって緊張して働くことができるのである。金持に生まれたからといって、一生が幸福だときまってしまうわけではない。金持は、墮落しやすい。かえって金のために、家庭上にも、事業上にも、不幸になる場合が、数かぎりなくあるのである。だから、生まれつきだけで、幸不幸がきまり、したがって不公平だと決めてしまうのは、たいへんな考えちがいである。人の一生というものは、その心がけによって、幸福にもなれば不幸にもなるので、生まれたときの条件によって幸、不幸が決定されるのではない。

幸不幸のきめ手は、何であろうか。それは、わが人生に生きがいをどのくらい見いだしているか否かにある。人生における、自分の目標を失った人ほど、不幸なものはない。不具者に生まれついても、輝かしい一生をおくる人はたくさんあるのである。手も足もない中村久子さんという人が、いかに感激をもって、そのすばらしい人生をおくっていることか。

野口英世博士のお母さんは、酒のみの夫にとついできて、赤貧の中に、あえいでいたようにみえる。しかし彼女のまめまめしい、けなげな働きは、そのまま子供に伝わり、無類の勉強家の世界的大学者が生まれたのである。その野口英世博士も、幼いと



自分が運命を左右する

丸山竹秋

きに火傷をして不具者になったことから、医学を志し、数々の偉大な業績をだしたことを、よく見定めた。生まれたときのわが身、わが環境がよくないからといって、ゆううつになる必要は、本来ないのである。生まれはどうであるうとも、「これがよい」と心得て明るく仕事に打ち込むとき、幸福がどんどん飛び出してくる。

かけがえのない親の、その子として、このような眼鼻を、手足をもって、生まれたことが、じつは、よいのである。この鼻をもちこの手をもって生まれているのは、しかるべき大自然の理由があつて、そうなっているの、真の意味での不公平は、ないのである。このわが家、このわが環境を、よしとして受け入れ、それぞれの人生を明るく築いてゆくとところにこそ、真の味わいが、またふかい喜びが、あるのである。しかし公平にせよといっても、たとえば、皆が皆、同じ顔立ちで、同じ服装で、同じところを歩いていたのでは、見分けさえつかないではないか。

身も心も、自分と同じだという人間は、ほかにはいない。この意味で地球上においては自分は唯一無二、貴重きわまりなき存在だ。この尊い自分に気がつくとき、外見上の幸不幸にとらわれて、生きがいをなくし、一生の幸福を取り逃がすことがあつては、これほどつまらないことはないと思う。運不運は、自分の心がけによって、どちらにでも、動いてゆく。

『幸福の決め手』より